

今の高校生が40代になる頃について考えてみたい。子どもは“未来からの留学生”である。

日本の未来を語るキーワードとして「人口減少と高齢化」「デジタル化」「グローバル化」を挙げることができる。これらが、今以上に顕在化し、今後大きな変化の局面を迎える。ダイナミックなイノベーションで乗り越えなければならないと言われている。

人口減少と高齢化がもたらす影響として、2053年に人口は1億人を切り、高齢化率は、ほぼ40%になると言われている。労働人口が減れば定年は延長され、70歳、80歳まで働く時代になるかもしれない。経済は縮小し、インフラ、年金など公的扶助が破綻する可能性もある。自助、公助、社会とのつながりの重要性が高まる。

高校生が40代になる頃は、人工知能が人間の知能を超えるシンギュラリティ（技術的特異点）を迎えると言われている。この問題を「2045年問題」と呼ぶ。その時重要なのは、高いデジタルリテラシーで機械を使いこなせることである。そして、AIに代替できない人間ならではの知性であるホスピタリティ、志、創造性を持つことである。

グローバル化が意味するのは、人口減少により国内市場は漸減し、日本は世界に市場を求めるしなくなる。一方、世界ではナショナリズムが高まっている。資源の乏しい日本は世界で孤立しては生きていけない。世界平和に貢献し、グローバル、地球規模で存在感を高める必要があるということである。

このような時代においては、「つぶしの利く」とされたジェネラリスト、すなわち広範囲な知識や技術、経験を有する人の浅い知識ではAIに代替されてしまう。深い専門性をもったスペシャリストが必要である。目指すのは複数の専門性を持ち、それをつなぐ教養をもった人材である。

ただ与えられた業務をこなして仕事に埋没するのではなく、今20代なら30代にどうなっていたかの目標を持ち、時代の流れを読みながら自己投資を続ける。例えば大学院で学び直す、経験を再構築して強みに変えるといった知の創造が必要である。終身雇用が前提ではない時代にあっては、成長し続けていくことだけがキャリアを助けると言える。

では、高校生が将来スペシャリストとして生きていくために、今できる準備とは何か。変化の時代にあって学び続ける力は必須である。新聞や本を読む、SNSだけでなく対面で会話して他者に理解してもらい、世界に出て異質な人と触れ合い視野を広げるといったことを通じて知的基礎体力とでもいうべきものをつける。決して容易なことではない。だが、楽をして基礎を身につけることはできない。

また、社会をどうよくしていくかを考える経験を積んでいく必要がある。授業で学習した知識を総合して課題に取り組む課題解決型の授業が有効である。「総合的な探究の時間」がそれにあたる。社会への関心が高まったり、学ぶ意味を理解したり、学習意欲が高まるはずである。実践の場に飛び込んで初めて人は気づきを得られる。それは、先生から与えられるものではない。自らの気づきこそが原動力となる。

では、教師はどのように生徒に働きかければよいのだろうか。社会と学びを接続しておもしろみをもたせたり、高校生の気づきが社会にどんな意味をもつか動機づけしたりと、生徒に目標をもたせて「導く」役割が今まで以上に重要になってくるのではなかろうか。